様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 ２６ 日現在

機関番号：３４５０６
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2015～2019
課題番号：１５Ｋ０２２３４

研究課題名（和文）墓誌の表現分析を基盤とした日中韓三カ国の文化交流の応用的研究

研究課題名（英文）An applied research of cultural exchanges on Japan,China and Korea

研究代表者
廣川　晶輝（HIROKAWA, Akiteru）

甲南大学・文学部・教授

研究者番号：４０３１２３２６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の最大の目的は従来指摘されていない日・中・韓三カ国の古代の文化交流の様相を解明し東アジアの文化交流の理解を豊かにすることである。韓国国立民俗博物館の臨地調査研究の際、葬送儀礼に用いて死者の生前を称揚する漢文体の「輓章」を見出し「中国出土墓誌→韓国葬送儀礼の輓章」の影響関係を新たに発見した。「日本－中国」の関係のみならず「中国－韓国」さらには「日本－韓国」の影響関係を分析・論述する素地を得たのである。この素地に基づき、大韓民国にて国際学術大会における研究発表を重ねた。日本国内の墓・古墳の臨地調査研究を精力的に実施し、古代幹線道路に接する墓・古墳の持つ「示威・アピール性」の考究を進展させた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
日本国内の諸古墳への臨地調査研究を精力的におこない「墓・古墳のアピール性」の解明や古代幹線道路と古墳の関連の究明を進展させた。大韓民国の百済25代王武寧王陵にてはレンガ状の「磚(せん)」を積み上げた築造方法を、奈良県桜井市の花山東・西塚古墳にては榛原石を磚状に加工して積み上げた築造方法を臨地調査研究した。結果、「韓国－日本」の文化交流を明確に見出せた。また、花山東・西塚古墳では背面に「馬蹄型」の盛り土囲みを確認した。その後、大韓民国の江華島にて小円墳墓の背面に「馬蹄型」盛り土囲みを発見し、「韓国－日本」の文化交流理解の〈新機軸〉を得た。融合的かつ新たな文化交流研究研究を胚胎できた意義も大きい。

研究成果の概要（英文）：A clear and steady aim of my applied research is to explain cultural exchanges on Japan,China and Korea. On an investigation to National Folk Museum of Korea, I found flags which were used in funeral procession. The flag's name is "Bansho". I found a new cultural changing way from China to Korea. In several times, I have given lectures on international academic symposiums in Korea . And in several times, I have investigated to ancient graves which faced on ancient major road. And I found the grave's characters which appeal their dignities to us.

研究分野：日本文学

キーワード：万葉集　墓　日中韓文化交流　墓誌　輓章　伝説　古墳　山上憶良

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1)科研費交付による研究成果を踏まえて着想に至った背景

研究代表者廣川晶輝は、平成 19～21 年度科研費基盤研究（C）研究題目：「上代文学における墓の表現性についての基礎的研究」の交付を受け、研究成果として単著『死してなお求める恋心――「菟原娘子伝説」をめぐって――』（新典社、2008 年 5 月）を刊行した（一般社会人の方々や生涯教育を志す方々など多くの国民の方々に解りやすい表現となるように努めた。この点、科研費交付の成果の国民の方々への開示・説明のはたらきを十分に果たし得ている）。その研究の過程で、本研究の研究課題に繋がる下表の分析結果に基づく以下の結論を得た。

〔表Ａ〕

〈墓〉の機能	具　体　例
肉親（やそれに準じる親しい人物）を偲ぶ「よすが」	○昔こそ　外にも見しか　我妹子が　**奥槨（おくつき）**と思へば　はしき佐保山（『万葉集』巻 3･四七四） ○彼の忠信を詠（しの）ひ、雷の落ちし同じ處に彼の**墓**を作りたまひ（『日本霊異記』雷を捉ふる縁）
第三者（他者）に対しての顕示・アピール	○大伴の　遠つ神祖の　**於久都奇（おくつき）**は　しるく標立て　人の知るべく（『万葉集』巻 18･四〇九六） ○長き世の　語りにしつつ　後人の　偲ひにせむと　玉桙の　道の辺近く岩構へ　作れる**冢（つか）**を……（『万葉集』巻 9･一八〇一、田辺福麻呂）

〔表Ｂ〕

「第三者」によって現在まで語り継ぎ・言い継がれて来た「偲び」	○この道を　行く人ごとに　行き寄りて　い立ち嘆かひ　ある人は　哭にも泣きつつ　語り継ぎ　偲ひ継ぎくる……（『万葉集』巻 9･一八〇一 田辺福麻呂） ○いにしへに　ありけるわざの　くすばしき　事と言ひ継ぐ……（『万葉集』巻 19･四二一一 大伴家持）

「墓」は、〔表Ａ〕のように、肉親（やそれに準じる親しい人物）を偲ぶ「よすが」としての機能を持つ一方で、第三者（他者）に対しての顕示･アピールの機能をも持つ。第三者は〔表Ｂ〕に見られるように、この「顕示・アピール」に呼応して、死者に対する「偲び」を墓の前で語り継ぎ・言い継いだ。このことで、本来ならば肉親にしか偲びようがなかった「墓に眠る人物」に対して、「第三者である我れ」も偲び・慕うことが可能となっているのである。ここに、「偲び」の回路を開き得る「場所」としての「墓」の機制を見定めることができる。という結論である。

研究代表者廣川晶輝は、墓が持つ第三者（他者）に対しての顕示・アピールの機能、および「偲び」の回路を開き得る墓の機制について、さらなる追究を試み、中国碑文や中国出土墓誌の表現分析をするに至った。なぜなら、碑文や墓誌は、墓に眠る人の生前の偉業や美麗な容姿を称揚する目的上、上記機能が最も顕著に発揚しており、第三者に対して「偲び」の回路を顕著に開く、極めて実体的かつ現実的な存在だからである。そして、廣川晶輝は、中国碑文の文言が日本上代文学の表現に影響を及ぼしている道筋を新たに明らかにした（廣川晶輝, 山上憶良作漢文中の「再見」小考, 甲南大学紀要文学編日本語日本文学特集, 148 号, 2007 年 3 月, pp. 1－13）。概略は以下のとおりである。

『万葉集』の歌人山上憶良の作品「日本挽歌」の前置漢文に、「再見」という表現がある。この「再見」と同じ用法の用例は一般の漢籍には検出できないが、中国唐で「國史」を監修し文化の中枢にいた武三思の「大周無上孝明高皇后碑銘并序」に見つけることができる。遣唐使の経験がある山上憶良であるだけに、当時の唐の文化の摂取を強く指摘できる。

さらに廣川晶輝は、平成 22～26 年度科研費「墓誌の表現分析に基づく日中文化交流の基礎的研究」の交付を受け、その研究課題遂行上おこなった韓国の臨地調査研究において、重要かつ新たな分析点を発見した。廣川晶輝は平成 26 年 5 月、韓国外国語大学校開校 60 周年記念 日本研究所 国際学術シンポジウム「万葉集に見る恋と死―あなたを歌うこと―」に招聘され、「万葉集の亡妻挽歌」と題して講演した際、韓国国立民俗博物館への臨地調査研究を実施した。その折、右に示すような、葬送儀礼に用いる「輓章」を発見した。棺を乗せた御輿の前に掲げ死者の生前を称揚するこの漢文体の輓章は、「哀哉」という表現で始まる。これは中国出土墓誌に頻出する慣用表現である。つまり、**「中国出土墓誌→韓国葬送儀礼の輓章」**という影響関係を新たに発見したのである。平成 22～26 年度科研費の研究課題では「日中文化交流」を考究したわけだが、本研究課題では、**「日本―中国」**の関係のみならず、**「中国―韓国」**、さらには**「日本―韓国」**の影響関係を分析・論述する素地を得たことになる。「墓誌の表現分析を基盤として、従来指摘されていない日・中・韓三カ国の古代の文化交流の様相を解明し東アジアの文化交流への理解を豊かなものにする。」という明瞭な着想が必然的にもたらされた。

韓国葬送儀礼の「輓章」

(2)「墓」をめぐる日・中・韓文化交流研究の重要性

「墓」をめぐる文化交流は重要な研究課題である。新聞報道（朝日新聞 2008 年 2 月 20 日朝刊）、中国・山西省の太原市で 00 年に発見された北斉時代（550～577 年）の高級武官・徐顕秀（571 年没）の墓に描かれた壁画の全容が 19 日、九州国立博物館（福岡県太宰府市）であ

った研究会で太原市文物考古研究所の李非所長から報告された。人物像には、奈良県明日香村の高松塚古墳（7 世紀末～8 世紀初め）に描かれた男子群像と構図や持ち物など、そっくりな点が多くあり、日本の彩色古墳壁画の源流を探る手がかりとなりそうだ。築造年代は高松塚古墳が 100 年以上新しい。北斉の出行図（被葬者の魂につきそう従者を描く意匠。廣川注）が後世の隋・唐に伝わり、それが日本へもたらされた可能性もありそうだ。

は、その重要性を示唆する。加えて、上記国際学術シンポジウムにての招待講演の際の韓国国立民俗博物館への臨地調査研究において、上記新聞報道の「北斉の出行図」と同様の意匠の「墓」の様態が展示されていることを見出した。「日本―中国」だけの文化交流を分析するだけではなく、**日・中・韓において多面的に複合的に分析する可能性と効果**を見出したのである。

２．研究の目的

上記のような「研究開始当初の背景」に基づき、従来指摘されていない日・中・韓三カ国の古代の文化交流の様相を解明し東アジアの文化交流への理解を豊かなものにする。これが本研究の最大の目的である。研究代表者廣川晶輝は、文部科学省に申請し交付を得た「平成 20 年度私立大学等研究設備整備費等補助金」によって「金石文研究の基礎的かつ必須図書一式」を既に整備することができている。整備されたこの中国碑文と中国出土墓誌研究の良好な環境を活用し、日本における中国出土墓誌研究の拠点を構築したい。また、平成 19～21 年度科研費基盤研究(C)「上代文学における墓の表現性についての基礎的研究」・平成 22～26 年度科研費基盤研究(C)「墓誌の表現分析に基づく日中文化交流の基礎的研究」による成果を有効に活用することで、この目的を確実に推進する。また、日本上代文学の『万葉集』に収載される山上憶良の作品の表現の分析を継続し、日中文化交流研究を深化させる。さらに、墓・古墳の持つ「顕示・アピール」の機能、第三者の「偲び」の回路を開く機制の把握を、重層的かつ総合的なものへと深化させる。

３．研究の方法

(1) 中国出土墓誌の第一次資料のテキストファイル化

上記「研究の目的」にも記したとおり、文部科学省に申請し交付を得た「平成 20 年度私立大学等研究設備整備費等補助金」によって既に整備できている「金石文研究の基礎的かつ必須図書一式」を活用し、中国出土墓誌の第一次資料のテキストファイル化を継続する。具体的作業として、中国出土墓誌を収める『隋代墓誌銘彙考』における作業がある。

(2) 韓国国立民俗博物館にての葬送儀礼の「輓章」の文言の調査

韓国外国語大学校教授・副総長　崔忠熙氏、同教授・日本研究所所長　權景愛氏、韓国中央大学校教授　具廷鎬氏、同教授　李吉鎔氏の協力を得て、大韓民国の国立民俗博物館において、葬送儀礼の「輓章」の文言の調査を実施する。既に、韓国国立民俗博物館にて「輓章」の調査を実施した際に同博物館への御紹介を賜った韓国中央大学校名誉教授　朴銓烈氏と同教授　具廷鎬氏との綿密な協議の継続に基づいて研究を進展させる。

(3) 墓の機能・機制の追究のための、墓・古墳の臨地調査研究

幹線道路や航路の近くに築造された墓・古墳は、第三者に対しての顕示・アピールの機能、および、「偲び」の回路を開き得る機制が、極めて明瞭に示される築造物である。その臨地調査研究を継続して行うことは、本研究課題を推進し、墓の持つ上記の機能・機制の総合的理解を深めるうえで肝要であり必要不可欠である。具体的調査対象として処女塚古墳（神戸市東灘区御影塚町）がある。吉本昌弘氏「摂津国八部・菟原両郡の古代山陽道と条里制」（『人文地理』33 - 4、1981 年 8 月）は、古代山陽道の位置を推定した論考であり、その妥当性は推定古代山陽道の線上にある「深江北町遺跡」（神戸市東灘区）から「驛」と書かれた墨書土器が出土したことにより近年保証された。吉本論文により処女塚古墳が古代山陽道のすぐ脇に築造されていたことが証明され、『万葉集』の田辺福麻呂歌（巻 9・一八〇一）の「玉桙の　道の辺近く　岩構へ　作れる塚」という表現が古代山陽道と古墳が近接していた実態の反映であることが証明された。福麻呂歌には、墓の「顕示・アピール」の機能に応ずる「長き世の　語りにしつつ　後人の　偲ひにせむ」という表現があり、第三者としての「偲び」が開かれている。森浩一氏「菟原処女の墓と敏馬の浦」（『万葉集の考古学』1984 年 7 月、筑摩書房）は、処女塚古墳が「瀬戸内航路を意識した位置に造営されていて、海からの目印のような造形物」であったと指摘した。吉本・森両論文の指摘は矛盾しない。処女塚古墳は古代山陽道と瀬戸内航路の両方に面しており、陸路・海路ともに墓自体が持つ上記の機能・機制を明確に確認できる。研究代表者廣川晶輝は、神戸市教育委員会文化財課の協力を得て、「墓」の総合的理解を進め、本研究課題を重層的に推進する。

４．研究成果

(1) 墓・古墳の臨地調査研究に基づく、墓の機能・機制の追究の進展

平成 29（2017）年 9 月、奈良県指定史跡西宮古墳（奈良県生駒郡平群町西宮 543 番地）に赴いて、臨地調査研究を実施した。平群町に存在する当該古墳は一辺約 36ｍの方墳であり、二段のテラスを配して三段に築成されている古墳である。「平群町公式ホームページ」に「墳丘の南側、下段テラス面にあわせて精美な切石の横穴式石室を設け、羨道側石と天井石の前面を墳丘勾配に合わせて加工している。この状況から、石室の開口部を墳丘封土に埋め込むのではなく、扉状

の施設によって閉塞し、石室を墳丘外に明示していたことが確認できる。」と記されているとおりの築造状況を確認できた。つまり、墳丘の傾斜部分の傾斜角度 35 度に合わせて、羨道側石の最前面と天井石の前面を 35 度に傾斜させる加工が施されているのである。このような「見られることを意識した」当該古墳の築造状況の臨地調査研究を実施できたことは、「墓・古墳のアピール性」の解明を研究課題として設定している本研究にとってきわめて有益であり、研究を大きく推進させる臨地調査研究となった次第である。

平成 30（2018）年 12 月、大韓民国中央大學校日本研究所主催「2018 年度 中央大學校 日本研究所學術大會 日本文化における宴」に招聘され「天平万葉と宴」と題して講演した際、江華島においてユネスコ世界文化遺産に登録されている支石墓の臨地調査研究を実施した。三箇所の支石墓（江華支石墓・富近里チョムコル支石墓・鰲上里支石墓群）にわたって臨地調査研究を実施し、「墓の顕示・アピールの機能」についての研究を推進することができた点が意義深い。

さらに、平成 31(2019)年 10 月には、群馬県安中市教育委員会井上慎也氏の協力の下、幹線道「古代東山道」の要衝の地における「古墳の機能・機制」究明のための臨地調査研究を実施した。この臨地調査研究において、「後閑 3 号墳」の「T 字形石室」の形状が、横穴式石室が幹線道を通って中央から伝播した証である知見を得た。同地域の古代東山道に面す「築瀬二子塚古墳」の副葬品は韓国祭祀遺跡と関連する（後述）。幹線道「古代東山道」の要衝の地の古墳の臨地調査研究は、本研究が胚胎し、次なる展開としての「融合的研究」を導き出すことに直結する。

(2)「韓国－日本」の文化交流の具体的把握の実現

平成 27(2015)年 11 月、大韓民国忠清南道の百済王室の陵墓群「宋山里古墳群」の臨地調査研究を実施した。第 25 代王武寧王（461～523 年）の陵はレンガ状の「磚（せん）」を積み上げて築造されている（右上写真）。この形状に酷似する古墳が奈良県桜井市の花山東塚古墳・花山西塚古墳（右下写真）である。桜井市立埋蔵文化財センター展示解説は「磚状（レンガ状）に加工した榛原石を用いた」花山西塚古墳の「特徴的な石室形態や構築技術」に「中国や朝鮮半島など東アジアとの関連」を指摘する。「韓国－日本」の文化交流を如実に見出せるわけである。廣川晶輝は、上掲の大韓民国忠清南道の百済王室の陵墓群「宋山里古墳群」の臨地調査研究から日本に帰国後の同年度の平成 28（2016）年 3 月に、この花山西塚古墳の臨地調査研究を実施した。その際、桜井市教育委員会設置説明板に「北側斜面を馬蹄形に整形」の記述を認め、実際に花山東・西塚古墳双方の背面に「馬蹄型」の盛り土囲みを確認した。このような成果を得たうえで、平成 30（2018）年 12 月には、大韓民国江華島にて墳墓の臨地調査研究を実施した。そして、土地の小円墳墓を拝見した折、背面に「馬蹄型」盛り土囲みを発見した。「韓国－日本」の文化交流理解の〈新機軸〉を準備できたわけである。

臨地調査研究を実施した大韓民国国立公州博物館の図録掲載の写真

国指定史蹟「花山西塚古墳」廣川撮影

この〈新機軸〉は別の観点でも準備できている。平成 31（2019）年 2 月、福井県立若狭歴史博物館(福井県小浜市)にて福井県小浜地方にて盆の精霊船送り行事に使用する船に立てる「幡」を発見した。この「船」と「幡」の形態は、韓国国立民俗博物館の臨地調査研究の際に見た葬送儀礼の「御輿」と「輓章」の形態と近似している。朝鮮半島と北陸地方は海の交易において繋がっている。文化交流の今後の研究の〈新機軸〉となり得た。

また、関連する国内外の研究動向と本研究の位置付けも達成できた。大韓民国において前方後円墳が発見され「韓国－日本」の文化交流研究の進展が期待される現在、古代東山道に面す築瀬二子塚古墳出土の「金層ガラス玉」「垂飾付耳飾」と韓国祭祀遺跡との関連（高田貫太氏「築瀬二子塚古墳の副葬品をめぐる地域間交渉」、『築瀬二子塚古墳の世界』2016 年 10 月、安中市学習の森ふるさと学習館）は大いに注目される。同古墳臨地調査研究や中国石碑・韓国「輓章」の表現研究を推進し文学・文化・考古学の融合的研究により国際文化交流研究を推進する研究を胚胎できたことの意義は大きい。

この研究成果のもと、令和 2（2020）年度～令和 6（2024）年度科研費「墓の顕示機能の分析と墓誌の表現分析を基盤とした日中韓三カ国の文化交流の融合的研究」を申請した。そして、如上の研究成果が認められ交付が決定された次第である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計6件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 廣川晶輝	４．巻 122
２．論文標題 山上憶良の天平元年七夕長歌作品について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 『上代文学』（上代文学会）	６．最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 廣川晶輝	４．巻 169
２．論文標題 山部赤人「不尽山を望む歌」について	５．発行年 2019年
３．雑誌名 甲南大學紀要　文学編	６．最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 廣川晶輝	４．巻 97
２．論文標題 笠金村「養老七年吉野行幸歌」について	５．発行年 2018年
３．雑誌名 『美夫君志』（美夫君志会）	６．最初と最後の頁 28-41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 廣川晶輝	４．巻 117
２．論文標題 山部赤人「紀伊国行幸歌」の空間把握について	５．発行年 2016年
３．雑誌名 『上代文学』（上代文学会）	６．最初と最後の頁 45-59
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 廣川晶輝	4．巻 93
2．論文標題 笠金村「娘子に誂へられて作る歌」について	5．発行年 2016年
3．雑誌名 『美夫君志』（美夫君志会）	6．最初と最後の頁 37-50
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 廣川晶輝	4．巻 11
2．論文標題 柿本人麻呂「石見相聞歌」第一群長歌序奏部の表現について	5．発行年 2015年
3．雑誌名 萬葉語文研究	6．最初と最後の頁 79-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計24件（うち招待講演　20件／うち国際学会　3件）

1．発表者名 廣川晶輝
2．発表標題 赤人歌の時空―「神岳に登りて作る歌」について―
3．学会等名 美夫君志会（平成30年度6月例会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 廣川晶輝
2．発表標題 この瞬間が愛おしくて―七夕の日に読む『万葉集』の七夕の歌―
3．学会等名 2018甲南大学夏期公開講座（協力:入江泰吉記念奈良市写真美術館）（招待講演）
4．発表年 2018年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 神戸に伝わる万葉悲恋の歌
３．学会等名 みやざきの神楽 神戸公演2018（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 神戸に伝わる万葉悲恋の歌―宮崎県と神戸市の協定締結を祝して―
３．学会等名 神話のふるさと県民大学 「日向から畿内へ―記紀万葉の物語より―」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 山上憶良の天平元年七夕長歌作品について
３．学会等名 平成30年度上代文学会秋季大会 シンポジウム「山上憶良と漢籍・仏典」（招待講演）
４．発表年 2018年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 天平万葉と宴
３．学会等名 2018年度大韓民国中央大學校日本研究所學術大會「日本文化における宴」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 日本文化を伝える方法―菟原娘子伝説をめぐって―
３．学会等名 兵庫県立御影高等学校 総合人文コース グローバルスタディ課題研究「国語国文学セミナー」（兵庫県教育委員会）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 はぎを愛でる―「志貴親王挽歌」の「萩」の機能への理解―
３．学会等名 美夫君志会（平成29年度9月例会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 笠金村「娘子に誂へられて作る歌」について
３．学会等名 美夫君志会（平成28年度全国大会）（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 次点本と新点本
３．学会等名 美夫君志会（平成27年度6月例会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 国際交流のための日本の文化に関する学習会
３．学会等名 国際交流のための日本の文化に関する学習会(兵庫県教育委員会)（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 心の模様―万葉集と現代歌謡曲を結ぶ。巨匠の写真とともに―
３．学会等名 2015甲南大学夏季公開講座（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 神戸に伝わる万葉悲恋の歌
３．学会等名 平成27年度みさと万葉学習会(奈良県三郷町教育委員会)（招待講演）
４．発表年 2015年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 「恋ふ」ということ
３．学会等名 韓国中央大学校 日本研究所 2015年度秋季国際学術シンポジウム「７～８世紀の日本のことば―ひらがな・カタカナのできるまで―」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2015年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 〈情熱と冷静〉心のままに・心を見つめる―万葉集と現代歌謡曲を結ぶ。巨匠の写真とともに―
３．学会等名 2015甲南大学夏期公開講座（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 額田王と相聞歌
３．学会等名 シンポジウム「額田王に向き合う―万葉表現の基層―」（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 雄略天皇御製歌
３．学会等名 美夫君志会（平成31年度4月例会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 親と子の別れ―山上憶良の作品を中心に―
３．学会等名 大韓民国中央大學校日本研究所・同大学院日語日文学科主催「2019年度中央大學校日本研究所国際學術大會 An expression of sadness in East Asian culture」（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 『万葉集』が教えてくれる〈夫婦の愛〉のかたち―巨匠の写真と音楽とともに―
３．学会等名 2017甲南大学夏期公開講座（協力:入江泰吉記念奈良市写真美術館）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 『万葉集』の歌と現代アーティストの歌詞
３．学会等名 平成29年度みさと万葉学習会（奈良県三郷町教育委員会）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 『万葉集』に学ぶ小さな命への愛情―山上憶良の「子らを思ふ歌」を中心に―
３．学会等名 2019甲南大学夏期公開講座（協力:入江泰吉記念奈良市写真美術館）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 『万葉集』に学ぶ小さな命への愛情―山上憶良「子らを思ふ歌」と八木重吉の詩を中心に―
３．学会等名 令和元年度みさと万葉学習会（奈良県三郷町教育委員会）（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 現代アーティストの歌詞と『万葉集』の歌―1300年の時を超えて―
３．学会等名 兵庫県立御影高等学校総合人文コース ショートセミナー（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 廣川晶輝
２．発表標題 日本文化を伝える方法―菟原娘子伝説をめぐって―
３．学会等名 兵庫県立御影高等学校総合人文コース グローバルスタディ課題研究「国語国文学セミナー」（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計2件

１．著者名 廣川晶輝	４．発行年 2015年
２．出版社 和泉書院	５．総ページ数 378頁
３．書名 山上憶良と大伴旅人の表現方法―和歌と漢文の一体化―	

１．著者名 上野誠・大浦誠士・村田右富実・廣川晶輝他	４．発行年 2019年
２．出版社 笠間書院	５．総ページ数 248頁
３．書名 万葉集をヨム―方法論の過去・現在・未来―	

〔産業財産権〕

〔その他〕

甲南大学 研究者詳細 http://researchers.adm.konan-u.ac.jp/html/275_ja.html

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	具　廷鎬 (KU Chong ho)	大韓民国中央大学校・ASIA文化学部・教授	
研究協力者	朴　銓烈 (PARK Jeon Yull)	大韓民国中央大学校・名誉教授	
研究協力者	李　康範 (LEE Kang Bun)	大韓民国中央大学校・亞州文化学部・教授	
研究協力者	井上　慎也 (INOUE Shinya)	群馬県安中市教育委員会・文化財保護課埋蔵文化財係・係長 （文化財保護主事）	
研究協力者	葛本　隆将 (KUZUMOTO Takamasa)	奈良県生駒郡平群町教育委員会	